

## 論文

# 言語・文化多様性に関する一考察

鷹取 勇希\*  
平野 葉一\*\*

A Remark on Linguistic and Cultural Diversity  
Yuki TAKATORI & Yoichi HIRANO

## § 1. 問題提起

今日の地球規模的な問題を論ずる上での重要なkeywordの一つに“多様性”(diversity)がある。実際、2010年は国連によって「国際生物多様性年」と位置づけられ、「生物多様性条約」<sup>1</sup>に関わる国際会議COP10<sup>2</sup>が名古屋で開催されることになっている。この「生物多様性条約」は地球上の生物種の保全と持続可能な利用を目的としたもので、現在では地球規模での生物多様性を議論する視点として「種の多様性」(species diversity)、「生態系の多様性」(ecosystem diversity)、「遺伝子の多様性」(genetic diversity)の三つを定めている。生物多様性が重要であるのは、単に人間がさまざまな生物を持続的に利用するためではない。それ以上に、地球上の自然が生物多様性に支えられて維持されている事実を見れば明らかである。そして同時に、人間の生活もまた自然に依拠して維持されているのであるから、人間存在という点からして生物多様性は不可欠なのである。

その一方で、現在では言語や文化の多様性の保全という議論も活発である。たとえば、イタリアの言語人類学者でテラリングア<sup>3</sup>の代表者でもあるL. マフィ (Luisa Maffi) もその一人である。マフィは、生物多様性 (biological diversity) と言語多様性 (linguistic diversity) の相関を検討することで地球環境保全における言語多様性の重要性を説き、現在では言語多様性を文化多様性まで展開させて生物文化多様性 (biocultural diversity) の包括的な保全について検討し、またに実践的活動を進めている。

生物や言語・文化の多様性を保全する活動はそれ自体もちろん重要であるが、とくに現在の地球環境とそれに依存する人間生活の維持という点ではむしろ積極的に進められなければならない。しかし、これらの多様性を個々に考えると、それぞれの重要性や必要性の根拠という点では必ずしも議論が尽くされてはいないとも思われる。生物多様性に関しては、生物の有機的関連や相互依存が自然環境の維持に不可欠であるという自然科学的見地も含めた根拠が見出される。しかし、その一方で言語・文化多様性については、その重要性の根拠はなおも検討されるべき問題であると思われる。

\*東海大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期2年  
\*\*東海大学文学部ヨーロッパ文明学科

地球上に生活する多種多様な人々の言語や文化は個々のアイデンティティを象徴するものであり、その多様な生活様式が個々の地域の多様な自然を保持してきたという議論は理解し得る。また、本稿でも紹介するように、言語・文化多様性に富んだ地域ほど生物多様性が認められるという経験的、統計的検証も尊重すべきである。しかし、今日の地球温暖化に係るCO<sub>2</sub>排出量削減を考えてみても、問題はそれほど単純ではない。今日の人間活動は、一方では科学技術の進展によってもたらされるいわゆる“文明化”と、他方では伝統に価値づけられる“多様性の保全”という、ある種逆向きのベクトルによって右往左往しているようにも見て取ることができる。こうした現状にあっては言語・文化多様性はいかなる意味をもつのであろうか—まさにこの点に議論の余地が残されていると思われるのである。

こうした問題に対処するためには、言語・文化多様性についてより根本的な議論—ある意味で哲学的考察を含む議論—も必要となる。それは、言語・文化多様性とは何であるのか、人間存在にとって何を意味してきたのか、そして現在は何を意味しているのか、といった問題について検討することである。むしろ、こうした視点から言語・文化多様性を文明論的に価値づけることによって、その多様性の必要性をより明確に意味づけることが求められているのではないだろうか。

本稿の目的もそこにある。本稿では、多様性をめぐる現実的諸問題を国際関係や政治的・経済的立場から見ようというのではない。むしろ、言語・文化多様性の必要性を認識論的な視点から議論し、こうした問題への一試論を提示することを目指す。

以下では、本節での問題提起を受け、第2節でマフィによる言語・文化多様性に関する議論を取り上げ、その重要性の根拠の一端を紹介する。第3節と第4節では文化と言語の関係性について検討する。第3節では、言語学者の諸説を取り上げながら、文化と言語の相互依存性について検討する。また、第4節では、とくに“サピア＝ウォーフの仮説”を中心に、文化の形成と伝達に関わる言語の役割について論じる。そして、第5節において、自然と人間の関わりの中で言語と文化の位置を再検討し、そこから言語・文化多様性の意味づけを試みる。

## § 2. Maffiによる生物文化多様性

前節でもふれたように、今日の地球規模的な環境保全という問題に対して包括的に取り組んでいる研究者の一人が、イタリアの言語人類学者L. マフィ（Luisa Maffi）である。マフィは、とくに1990年代後半から生物多様性（biological diversity）と言語多様性（linguistic diversity）の相関を検討し、その結果として生物文化多様性（biocultural diversity）の保全を提倡するに至っている。マフィがこうした多様性に対する論拠として重視するのは、“持続可能性”（sustainability）である。以下では、マフィの比較的新しい論文から、その議論を追ってみる。

2007年に発表された論文「生物・文化多様性と持続可能性」<sup>4</sup>において、マフィは、まず人間が自然の外部にあって自然から分離された存在であり、そして、それゆえに人間は自然に

に対する支配を確立させることによってその関係性を保ってきたという構図を明らかにする。そして、現在我々が直面している「種の大規模な絶滅や生息域の条件悪化」や「生態系が有する機能低下」などという諸問題が、人間活動による自然への直接的あるいは間接的介在に帰されるという点を指摘する。その上でこうした問題への対処として、生物文化多様性の重要性を説く。その根拠としてマフィは、

「(生物文化多様性は) 環境に対する人間の言語、知識、実践活動の関わりに対する文化人類学やそれぞれの地域・民族に根付いた生物学や生態学にといった視点からの洞察から導かれたものであり、生物多様性と文化多様性の間には相互に絡み合った関係性が存在することを基本的仮説としている。」<sup>5</sup>

と述べる。こうしたマフィの主張はすでに2000年代当初から見られ、たとえば、2002年のハーモン (David Harmon) との共著の論文では、生物多様性への脅威が同時に世界の6000以上の言語を侵害し、その結果として「それぞれの言語を話す人々が文化共同体として蓄積してきた知識や知恵、生活様式、世界観も同様に消滅の危機を迎えている」と警告している。

ここでマフィが主張している個々の文化が蓄積してきた知識とは、たとえばその人々が日常生活をとおして獲得した自然に対する経験的知識や知恵を指す。実際、マフィはメキシコのTenejapa地方のTzeltalの人々に対するフィールドワークから、西欧的近代科学の浸透により人々から伝統的・習慣的知識が失われつつある状況を報告している。具体的には、政府による臨時診療所の設置と周期的回診によって確かに人々の医療の状況は改善されたが、人々は風邪や腹痛、下痢といった比較的軽い疾病でも何時間もかけて診療所を訪れるようになる。その結果、身近に自生する薬草などには頼らなくなり、世代が進むにつれてそうした伝統的な“土着の知” (indigenous knowledge) が失われていくという報告である<sup>6</sup>。

実際、土着の知を含む多くの分野の研究が言語多様性と生物多様性の相関を指摘している。それは、たとえば生物多様性は熱帯地域ほど豊富であり、同時にこの地域には数多くの少数言語が存在するというものである。こうした相関についてはすでに1992年のリオデジャネイロでのサミットでも議論され、公式記録として生物多様性の保全にとっての環境に対する伝統的な知識の妥当性が確認されている<sup>8</sup>。

マフィの指摘では、生物多様性と言語・文化多様性との密接な相互関連という議論が最初に登場するのは1988年に開催されたブラジルのペレンでの国際学会にまで遡るという。それ以降、個々の地域において見出される民族学的な生物学や生態学の研究が続けられ、いわゆる“土着の知”的在り方とくに自然や環境との関わりとしての知の重要性が明らかになってきた。こうした伝統的な知識とは、「植物や動物とそれらの生息域、生態的機能や相互の関係性などに関わるものであるが、それは同時に、自然資源の利用に関する多くの伝統的方法が、歴史的にも今日的にも、環境に与える影響が低くそれゆえに持続可能性を保つ」ものである。

このマフィの主張には重要な論点が含まれている。それは“持続可能性”という視点である。人間嘗めの歴史を振り返れば、人間は地域に根付き、その周囲にある自然を利用して生活してきた。その構図は、人間が多種多様な方法を用いることで生物多様性を維持させてきたと捉えることもできる。これは、言い換えれば、人間がさまざまな方法によって“野生の”状態にある自然資源に向かい、ときには管理し、また、ときには家畜化や栽培化という実践を重ねてきたことを意味する。そして、こうした実践をおし進めてきた根底にあるのが、自然との共存という意識の下で培われた伝統的な“土着の知”ある。したがって、“土着の知”が自然との関わりで成り立っている以上、その知は自然を枯渇させることはなく、それゆえに持続可能性を維持するのである。

ここに、生物多様性と言語・文化多様性の相関およびそれぞれの重要性を論じる意味が見出される。マフィの主張はまさにこの点を述べているのであるが、さらに続けて、これらの多様性保全の必要性を以下のように根拠づける。

「それぞれの地域での人間と自然環境との多種多様な相互連関および相互依存が世界規模で蓄積されているという事実は、グローバルな意味で生物多様性と文化多様性もまた相互連関し、相互依存していることを意味する。そして、それはまたこれら両方の多様性を保護することが重要であることを含んでいる。」<sup>10</sup>

総括すると、我々をとりまく地球環境の持続可能性を維持するためには、生物多様性と言語・文化の多様性の相互関連をふまえてこれらを包括的に扱うことが不可欠ということになる。これが、マフィの主張する“生物文化多様性”(biocultural diversity)である。

本節の最後に、“生物文化多様性”に対するマフィ自身の定義について紹介しておこう。

「生物・文化多様性は、生命に見られるあらゆる状況において生命自体がもつ多様性を含むものである。それは、生物的、文化的、言語的な表現で、それらは複雑に絡み合った社会的および環境的な適応システムにおいて相互に関連し、可能な限り共進し合う。こうした定義には、以下のようなキー・エレメントが含まれる：

1. 生命の多様性は、単にこの惑星上に見出される植物や動物の種、その生息域や生態系だけから構成されるものではなく、同時に人間の文化や言語の多様性からも成る。
2. これらの多様性はそれが独立して並行な状態で存在するのではなく、複雑な様相で相互に関連し合い、影響を及ぼし合う。
3. こうした多様性の間の関連は、それぞれの地域で時代をこえて続けられてきた人間と環境のあいだの相互適応をとおして展開してきたものであり、場合によっては共進的性格をもつ。」<sup>11</sup>

### § 3. 言語・文化の関係 — 相互依存性

前節で紹介したマフィによる“生物文化多様性”は、たとえば熱帯地域における生物種の多様性と言語・文化の多様性—多様な少數言語をもつ集団とその多様な生活様式—という相関に見られるように、さまざまなフィールドワークに基づく検討から導かれたものである。その根底には、これら双方の多様性が自然や地球の持続可能性の維持にとって不可欠であるという意識が存在する。とくに人間営為という点から重要となるのは、地域に根ざした言語の多様性であると考えることができる。実際、マフィ自身も次のように述べている。

「この分野（生物多様性を検討する分野）の支持者の主張は、生命の多様性は地球上に展開している種や文化の多様性だから成るのではなく、人間が時代を経て展開してきた言語の多様性にも依存するというものである。この分野のアプローチとして強調されるのは言語の役割で、それは文化的価値観、伝統的知識や実践方法を伝達し交換する手段として働き、また、それがゆえに人間と環境を仲介し相互の適応を可能にする。」<sup>12</sup>

このマフィの言葉からは新たな問題が提起される。それは、言語が「人間と環境を仲介」することで「相互の適応を可能」にする点に関連する。ここで「環境」というのは、人間をとりまく自然—とくに人間が対峙し、それを何らかの意味で対象と認識した自然—である。したがって、言語は人間の「文化的価値観、伝統的知識や方法を伝達する」ことで、人間営為と自然の「相互適応を果たす」ことになる。それでは、言語は人間営為そのものにとってはどのような役割を果たすのであろうか。その役割とは、言語の伝達機能に留まるものなのであろうか。あるいは、言語はそれ以上に、その伝達機能がゆえに自然との関わりという点で人間による文化形成の一端を担うのであろうか。こうした問いは言語・文化多様性を考える上で重要な論点になるように思われる。

言語と文化をめぐる関係性に関しては、すでにさまざまな研究が進められている。以下では比較的最近の研究からいくつかを取り上げ、言語と文化の関係性について検討を試みる。

たとえば、M. フォングは2006年の著作のなかで、文化は一つの社会システムであり、「行動を生み出し説明する規定を共有する個々人の組織体」と位置づける。そして、その組織体に属する人々が「日常生活におけるコミュニケーション、振る舞い、価値判断に対する基準を共有する」とし<sup>13</sup>、文化としての組織体が、人間営為を決定し伝達すべき一つの価値基準を境界条件として形成されることを主張する。フォングは文化をこのように位置づけた上で、言語について言及する：

「言語とは一つの表象システムであり、そのシステム内では相互に同一視され、関係づけられた人々によって意味が共有されている。」

「“話される言葉”は、人々にとって伝達の媒体となる手段であり、その集団においては経験を表現したり経験を創造したりすることによって関係性が保たれる。」<sup>14</sup>

フォンゲによれば、人間営為の価値を規定する基準を備えた集合体のシステムが文化である。人々は共通の価値基準によってその文化共同体の構成メンバーとして位置づけられる。そして、その際に人々が共有する「表象システム」が言語となる。言い換えれば、こうした“共通の”価値を有する文化共同体のなかで、個々人が自らの思考や行動を表現し、それらを伝達する手段が言語である。さらに、人々が“共通の”言語を用いることで、それを媒体として“共通の”文化を伝達することになる。とくに、上の引用にあるように、「話される言葉」は文化共同体のなかで人々の間のコミュニケーションおよび関係性を保つ道具となる。

フォンゲの主張は、ある集団において文化と言語が相互に依存し合うという状況を指摘したものである。実際、彼自身、「書かれる言葉、話される言葉は文化によって形成され、また逆に、そうした言語は文化を形づくる」<sup>15</sup>と述べている。

フォンゲに示された文化と言語の相互関連性は、他の研究にも見られる。たとえば、G. ゲイは、文化がコミュニケーションの形、機能、内容を意味づける“規定的なシステム”であるとし、その上で、

「異なった文化システム内で用いられる言語は、人々がどのように考え、どのように感じ、どのように行動するかということに大きな影響を与える。」<sup>16</sup>

として言語を特徴づける。ある文化システムに属する人々は、そのシステム内部での伝達手段の必要性から言語を用い、それが同時にシステムを維持することになる。したがって、異なった文化システムではそれぞれ異なる固有の言語が用いられ、そうした言語がそれぞれの文化を形成する。そして逆に、個々の文化は、その内部での伝達手段としての言語を形成することになる。

フォンゲやゲイによる文化と言語の相互依存性に対し、H. D. ブラウンは文化と言語の関係性について、その文化における人間の思考や行動を含めて議論を展開する。ブラウンはまず文化を次のように特徴づける：

「文化とは生活様式すなわち生き方である。それは、我々がまさにその範囲内で存在し、思考し、感じ、他人と関係をもつための脈絡である。」

「文化は、人々を集団として結びつける糊のようなものである。」<sup>17</sup>

ブラウンによれば、文化とは社会や個人の存在を形づくるテンプレートのようなものであり、その下で個人それぞれが認識や感情に基づいた行動の脈絡を確立させることになる。そして、人々が認識や行動を共有し得る集合体にあっては、人々はそうした共同体を形成する共通の“何か”によって結びつけられている。この結合を保証しているのが文化なのである。

ブラウンはさらに続ける：

「文化は我々にとって、個人と集団を規定するアイデンティティである。それは集団における我々の行動を統制し、われわれに社会的位置づけという事柄に対して敏感にさせる。」

「文化はまた次のいくつかの要素によって定義づけられる。それは、アイデアや習慣、技術や道具であり、それらがある時代のある集団に属する人々を特徴づける。」<sup>18</sup>

すなわち、文化によって“糊づけ”された人々は、その文化を選択したことで自らの思考や行動を自制し、それゆえに、文化によって規定される集団の構成員としての社会的存在を意識することになる。そして、こうした集団内で生きることで、人々はその文化によって規定された思考法、感受性、生活習慣を身につけることになり、逆に、そうした人間営為が文化としての集団を特徴づけていくのである。

それでは、こうした文化に対して言語はどのような意味をもつのであろうか。この問いに対してブラウンは、言語の役割について次のように述べる：

「言語とは、一つの生活様式であり、我々の存在の基礎に位置づけられるものであり、思考と感覚に影響し合うものである。」<sup>19</sup>

したがって、言語は、人間の存在に関わってその生活様式そのものとなり、同時に、人間の思考や感覚に属することでその認識を促すことになる。すなわち、言語の展開は人々の認識を助長し、それらが相互に依存しながら人間の思考と感覚とに絡み合っていくのである。

こうした言語の役割をもとに、ブラウンは文化と言語の関係性を次のように説明する：

「文化は、確かに我々の人間存在に対してまさに細い繊維のごとく深く浸透している。しかし、その文化に属する人々の間の伝達手段である言語は、文化の表現としてもっともわかりやすく、理解しやすいものなのである。」<sup>20</sup>

さらに、ブラウンは、人々の認識や習慣において見出される文化の形態が多くの場合に言語によって明確にコード化されるという点を指摘し、言語と思考が文化によって関係づけられるとする。こうして、文化は言語によって明確に表現されることになる。すなわち、言語はその集団の文化を表現し、その表現によって伝達された人間営為はその文化集団としての人々の思考や行動を生じさせることになる。

これまで見てきたように、文化と言語が相互依存することで関係性を保つという主張はもっともあるようと思われる。言語・文化多様性という点から考えれば、異なった言語を用いる人々が異なる文化を形成し、同時に個々の文化の内部での表現および伝達の手段としての言語がそれぞれの文化を維持させているという構図が、これらの多様性の相関を妥当なものにしているのである。

#### § 4. Sapir-Whorfの仮説からの考察

前節での議論に対し、以下では文化と言語に関する関係性について、今日“サピア＝ウォーフの仮説”（Sapir-Whorf Hypothesis）と呼ばれる理論から再検討を試みる。

“サピア＝ウォーフの仮説”は、E. サピア（Edward Sapir）とその弟子であるB. L. ウォーフ（Benjamin Lee Whorf）の研究を基礎とした理論で、今日では“言語相対性”として知られている<sup>21</sup>。しかし、本稿では言語相対性の問題はさておき、文化と言語の関係性という視点からこの“仮説”を眺めてみる。

“サピア＝ウォーフの仮説”を端的に述べると、「それぞれの文化が有する言語は、その文化の範囲内での思考の方法と習慣を決定する」ということになる。すなわち、この“仮説”は、人間の思考や行動の様式がその言語習慣に左右されて規定されることを主張するもので、これに従えば、異なった言語を用いる集団間では思考の様式、それゆえに行動の様式も異なることになる。

サピアは次のように述べている：

「人間は単に客観的な世界に生きているだけではなく、また、通常理解されるような社会的行動の集団としての世界に生きているだけでもない。むしろ、それぞれに固有の言語に著しく依存しながら生きている。そして、その固有の言語は、それぞれの社会の表現手段となっているのである。こうした事実は、“現実の世界”がその集団における言語的習慣の上に無意識に築かれ、広範にまで及んでいることを示している。…我々は目で見、耳で聞き、そして非常に幅広い範囲でさまざまに経験するが、それは、我々のコミュニティの言語習慣が、対象とするものに対して何らかの解釈を選択するよう前もって定めているからであり、我々はそのように行動するのである。」<sup>22</sup>

この仮説は、人間の思考および思考による世界把握が、その人間の用いる言語構造に依存することを示唆している。サピアは

「与えられた発語能力と秩序立てられた言語は、人間の集団としての特徴である。」<sup>23</sup>  
 「言語は“社会という現実世界”へと導くガイドである。」<sup>24</sup>

と述べ、すべての人間がそれぞれ個別に有する言語の存在によって特徴づけられ、同時に、そうした言語によって社会が特徴づけられることを主張する。この根底には「あらゆる言語はそれ自体表現するための共通の技術なのである」<sup>25</sup>という意識があり、人間がこの技術としての言語を用いて表現することによって、その人間が属する世界形成がなされることになる。

それでは、それぞれの人間にとて言語はどのように思考と結びつき、世界を形成するのであろうか。これに対してサピアは、「言語と思考法は複雑に織り混ぜられている。」<sup>26</sup>として、次のように述べる：

「言語は、我々にとって思考を伝達するシステム以上の意味をもつ。言語は我々の思考、精神を覆う見えない装飾物のようなものであり、その精神の表象としての表現に対し、それより以前に準備された形を与える。」<sup>27</sup>

サピアの主張は、要するに言語は発せられる以前に精神の表現形式を準備していることを意味する。人間の言語および認識は基本的には個々人に密接に結びつけられており、人間精神が何かを思考する際にはすでに、思考の根底では言語によるimplicitな形での準備がなされているというのである。それゆえに、思考は言語の反映となる、同時に、人間は個人の言語が他人の言語に、それゆえに個人の思考が他人の思考に影響を与え、また、依存することも確かである。したがって、言語は我々の思考の伝達媒体となる。要するに、人間の言語は思考の背景にすでに組み込まれており、人間は自らが用いている言語の構造によって現実を理解するように仕向けられてきたのである。

サピアの言説を基に文化と言語の関わりについて検討するなら、次のような構図が見えてくる。ある集団である言語が用いられているとき、その言語は根底では人々の思考を準備し、その思考が人々の行動を決定する。さらに、思考がある人の行動として、あるいは、その人が発する言語を媒介として他の人に伝達され、その思考に影響を与える。こうしてその集団の文化が規定され、形成されていく。つまりは、「文化は言語によって規定され、形成される」となる。もちろんこうした構図は極論であると考えられる点もあるが、少なくとも“サピア＝ウォーフの仮説”を前提とすれば、文化と言語の基本的な構図はこのようになる。

確かに、言語と思考の伝達や文化の伝達を考えれば、ある文化的集合体において文化と言語が相互に依存することは否定できない。しかし、前節で述べた文化と言語の相互依存性にしても、その根底には“サピア＝ウォーフの仮説”が何らかの形で作用しているとも感じられる。むしろ、別な視点—原初的、根源的意味—から考えると、“サピア＝ウォーフの仮説”は言語が人間の思考と行動を、それゆえに文化を規定するという構図を与えていることがわかる。

これに類する主張はさまざまなもので見出されるが、たとえば、S. チェイスは、

「言語は、人間のまだ足りない部分を養育し、人間の共同体を組織し、世代から世代へと文化を伝える核である。」<sup>28</sup>

と述べている。ここにも、文化の形成と伝達という言語の役割が示されている。これは、サピア自身の

「文化が蓄積され、歴史的経緯の中で伝達される上で、言語は明らかに重要な役割を果たしている。これは、言語が教養として洗練されているかというだけでなく、言語が同時に根本的な意義をもつことに他ならない」<sup>29</sup>

という主張と通じる。しかし、言語が根源的、原初的（primitive）な意義をもつという点では、サピアは言語を文化の根底により強く位置づけていると思われる。

文化と言語の関係性に関する議論として、本節の最後にワットモフの主張について紹介しておく。

ワットモフはまず“定義”について次のように述べる：

「定義することは、対象に固有で独特の性質、その対象を特徴づけするような姿を見出すことである。…定義することは同時に対象を差異化することであり、他の対象から区別するための姿を示すことである。」<sup>30</sup>

これは、ある対象を定義することが、他との差異を明らかにし、その対象がもつ独自で固有な性質を描き出すことであることを意味する。ワットモフにとって言語とはまさに上の“定義”的存在である。それは、彼が言語の機能の一つを、対象を他から分離しカテゴライズすることにあると捉えているからであり、言語のこうした特徴がゆえに、言語は文化的特異性（idiosyncratic）と固有性（inherent）を規定することになる。

これは、言語がそれを用いる人々の文化を差異化するという機能について述べたものであるが、さらに次のように続ける：

「言語的な現象は社会的な集団によって条件付けられる。その集団とは社会的に決定される環境を意味し、それはその集団の言語様式とその集団が有する言語以外の習慣によって決定される。」<sup>31</sup>

ここでのワットモフの論点は、言語による表現と伝達が社会という集団に依存するという点にある。そして、その集団は、言語が言語以外の習慣と相俟つてある環境を形成し、その環境によって特徴づけられた文化的集団であることになる。したがって、集団を規定する要素の一つは言語であるが、それ以外に「言語以外の習慣」もまたその要素となり得ることになる。しかし、「言語以外の習慣」は何によって形成されるのであろうか。それは、“サピア＝ウォーフの仮説”という点から考えればやはり“言語”となるのであろうが、ワットモフの主張ではそれは必ずしも明らかではなく、また、言語以前の思考形式の所産であるという可能性も否定できない。

しかし、ワットモフは、こうして形成された集団においては言語による表現、伝達によって集団の関係性が維持されるとして、次のように言及している：

「言語は関係性、すなわち、ある共同体を構成する人々の間で確立され、維持されてきた関係性のための手段である。その共同体とは、大きくても小さくてもよく、たとえば村や集落あるいは世界的な規模でもよい。」<sup>32</sup> (p.25)

鷹取 勇希\*  
平野 葉一\*\*

ワットモフの主張は前節の文化と言語の相互依存性と類似する議論ともとれるが、むしろ、“サピア＝ウォーフの仮説”以降の過渡期的議論の一つ—すなわち、言語が社会的集団に対する形成要素でもあり、また、社会的活動の形式でもあるという議論—とも考えられる。

## § 5. 言語・文化多様性の必要性—自然の多様性との関わりから

前の二節では文化と言語の関係性について検討した。それは、この関係性が言語・文化多様性について考える際に重要なと思われるからである。もし、“サピア＝ウォーフの仮説”が説く「言語は人間の思考や行動を、それゆえに文化を規定する」ことが正しいのであれば、我々は言語を指標として言語・文化多様性を考えるという構図を描くことができる。もちろん本稿においてはこの“仮説”を指示するだけの十分な根拠を得てはいないが、それでも、第3節で検討したような文化と言語の相互依存性を是とした場合であっても、文化と言語の双方を一つの価値集合体と考えれば、その議論はそれほど変わらないものになるであろうと思われる。本稿の出発点がマフィの主張する“生物文化多様性”とその根拠である“持続可能性”であることをふまえ、本節では、人間と自然との関わりから言語・文化多様性に対して考察する。

以下では“サピア＝ウォーフの仮説”を前提として検討を進める。

まず、人間営為と文化について次の二つの仮説をおく。

[仮説1] 「人間営為は文化（文明）を形成する」

[仮説2] 「人間営為は根源的には自然との対峙の結果である」

[仮説1] に関しては、本来ならば「文化とは何か」、「文明とは何か」といった本質的な議論が必要であろうが、ここでは人間が生きる上で集団を形成することで文化形成がなされることを前提として考えることにする。そのように考えれば、この仮説は自明となる。また、[仮説2]において人間営為とは人間の思考、行動などあらゆる対象を含むが、それらが根源的には自然との関わりから生じると考えれば、これも真となる。たとえば、「衣・食・住」のどれもが自然と対峙するなかでの人間の「生への欲求」から生じることを考えてみればよいだろうし、原初の時代はもちろんのこと、たとえ高度に進んだ都市文明においてでさえ、人間が自然と直接対峙せず道具とシステムに囲まれて生を維持しているのは、それらが自然に対する人間の生を保障するからである。

次に、上の二つの仮説（命題）を真とすれば、これらから以下の仮説が導かれる。

[仮説3] 「人間文化は根源的には自然との対峙の結果である」

この仮説は、最初の二仮説が真であれば同様に真となる。

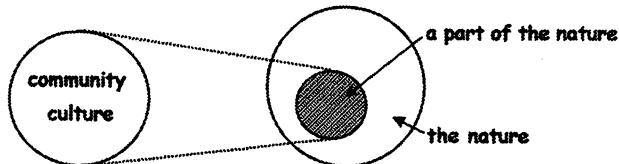
ここで問題となるのは、文化形成において人間はどのような自然と対峙しているのかという問題である。科学的研究が自然のさまざまな姿を解明しているにも拘わらず、科学の進歩—道具や装置などの技術的進展も含めて—は常に新しい事象を見出すに至っている。これは、科学が対象とできるのが自然全体ではなくその一部に限られていることを示している。すなわち、人間には未だ見えない自然が隠されているのである。したがって、人間は自然から与えられた部分と対峙し、文化を形成してきたことができる。

このように考えると、[仮説3]は次のように書き換えられなければならないくなる。

[仮説3'] 「ある集団の文化は、根源的にはその集団が把握し得る自然の一部との対峙の結果である」

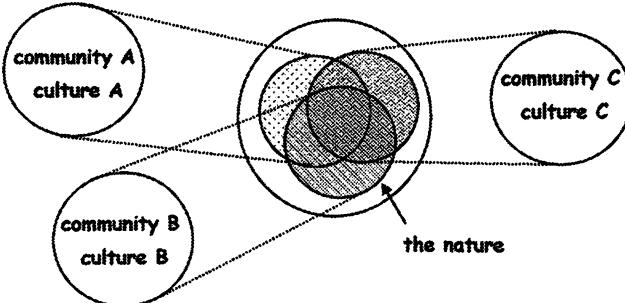
したがって、ある集団（community）の文化は、自然の一部—自然から見せられた部分—に対する人間営為の結果として生じたことになる。そこで、その文化を人間営為が集められた一つの集合と考えれば、この集合が、集団が把握し得る自然の一部と対応関係をなすと見なすことができる。すなわち、数学でいう写像なる概念を形式的に用いれば、【図1】に示すような構図が描かれることになる。言い換えれば、次の【仮説4】が尊かれる。

[仮説4]「人間文化は、人間営為から自然の内部へ投影された像として対応関係をもつ」



【図1】

ここで重要なことは、ある集団が自然の“ある一部”を把握することで集団固有の文化を形成しているのであれば、別な集団は自然の“異なった一部”を把握することでその集団固有の文化を形成する可能性があるという事実である。したがって、個々の集団の文化から自然の内部に投影された像は、たとえ共通部分をもつことがあろうとも、必ずしも一致しないことになる。この状況を示したのが【図2】である。



【図2】

この構図が示しているのは、個々の集団がそれぞれに多様な自然の異なった部分を把握することで異なった文化を形成していること、言い換えれば、文化多様性である。すなわち、対象が異なればそれに対峙して生じる人間営為も多様になり、その多様性が文化形成に反映されるのである。

こうして、人間営為と自然との関わりという視点から、文化多様性の一つの捉え方が提示されることになる。ここで重要なのが、言語と文化の関係性である。集団と自然の対応を表す構図に対し、“サピア＝ウォーフの仮説”を導入してみる。

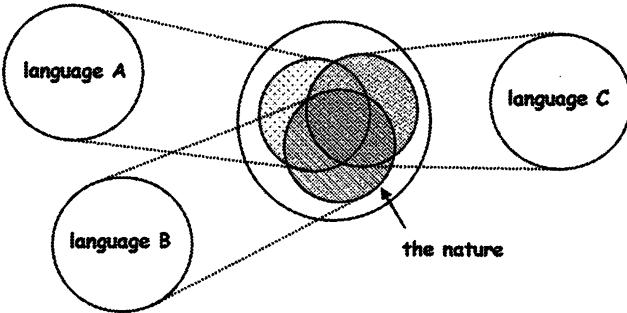
[仮説5]「言語は人間営為を、それゆえに人間文化を規定する」

(Sapir-Whorf Hypothesis)

ここではこの仮説を前提としているが、たとえば、ウォーフにはホピ族の時間感覚に関する研究がある。これは、ホピ族が動詞の時制をもたず、動詞の形が時間経緯と状態に関わって定められるというものである<sup>33</sup>。これは、たとえ時間を考えてみても、すべての人々が“過去”、“現在”、“未来”という時制として同じ様式で捉えているのではないことを示している。むしろ、こうした人間の行動の把握が、用いられる言語自体に依存しているのであり、その意味で、言語が現実世界を規定しているのである。

また、自然との関係性という点では次のような例もある。ウォーフはエスキモーの集団が“雪”のさまざまな状態に対して、“降っている雪”、“地面に積もった雪”、“氷のような雪塊”、“半解けの雪”、“風に舞う雪”等々というようなさまざまな表現（呼び方としての名詞）をもっているとする<sup>34</sup>。これは、この集団が雪の状態に応じてさまざまに行動するために、それぞれの状態に応じた表現が必要となることを意味する。しかし、これは単に「人間営為が言語を規定する」のではない。むしろ、自然の状態に対する最初の行為がこの集団の活動の方向性を決めるのであり、したがって文化形成の方向性が決定されるのである。すなわち、この集団は“雪”のさまざまな状態から自らの行動を思考する。このとき、言語はその思考を促すのである。そして、こうして導入された一つひとつの言葉の総体が、表現と伝達を通して文化形成を果たすのである。

[仮説5]を【図1】の構図に当てはめて考えてみる。すると、ある集団は眼前に存在する自然に対し、自らの生を思考する。それはその集団に与えられた自然の姿からの思考であり、その対象に対する行動が言葉として表現される。その表現された言葉は、その集団の行動や在り方を規定することになり、つまりは文化を形成する。このように考えると、【図1】において集団（community）や文化（culture）として表された集合を言語（language）で置き換えることができる。したがって、【図2】に示された構図は、さまざまな集団が個々に対象とする自然に対して導入した言語が、自然の中の異なった領域として投影されることになる（【図3】）。



【図3】

ここで、ある集団が、対象とする自然に対してどのように言語を選択するかを考えてみる。その集団は自然と対峙し、生への欲求を含めた自らの生存を目的として思考し、言語を、そして行動を選択する—少なくとも当初はそうであったはずである。したがって、その言語は、そして、その言語が形成する人間営為、文化は、対象とする自然を最大限に利用するものであつたにしても、決してそれを破壊することのないものではなかつたであろうか。すなわち、その集団が感じとったであろう“自然のキャパシティ”を超えることのない範囲に限られていたのではないだろうか。ここに、自然との持続可能な共存が見出される。言語は、それぞれの集団が把握した自然に依存し、その言語によって規定された人間営為は、その自然と共に存しながら持続可能な範囲で利用するという意味をもつてゐたと推察されるのである。

一方、それぞれの集団が自然の異なつた部分を対象としていることも重要である。言語の多様性はすなわち集団の多様性を意味する。そして、同時に、その多様性は見えている自然、把握し得る自然の多様性に依存する。したがって、言語の多様性は、それぞれの集団が対象とした自然の特性を象徴し、それぞれに“自然のキャパシティ”を尊重する文化の在り方を規定してきたことで、自然全体の持続可能性を保持してきたとも考えることができるのである。これは、第2節で紹介したマフィの主張にもつながる。

これまでの議論では“サピア＝ウォーフの仮説”を前提としていた。しかし、もしこの“仮説”を前提とせず、文化と言語が複雑に相互依存すると考えてみても、上での考察は大きく変わることはないと思われる。その場合は、言語は文化とともに一つの集合として表されるであろうから、言語を含めた文化多様性として上と同様の議論が展開されることになる。

これより、“サピア＝ウォーフの仮説”的是非は別としても、少なくとも言語・文化の多様性が、持続可能な自然を維持してきた構図が描き出されるのではないかと思われる。

## § 6. 結論にかえて

これまで見てきたように、“生物文化多様性”は自然の、そして地球の持続可能性にとって不可欠であることは明らかであると思われる。最後に、それぞれの集団—言語にしろ、文化にしろ—の対象が自然の一部であるという点について多少ふれておく。

科学とそれに根付く技術を手にした人間は、常に自然に働きかけて自らの文明を展開させ

てきたと考えがちである。それは、ある意味で人間は自然を把握し、解明し得るという錯覚一ある種の奢り一を生じさせる。もしそうであるならば、自然に対する人間の見方は monoculture 的<sup>35</sup>であるといわざるを得ない。それも、たとえ科学をもってしても人間は自然の全体を見るることはできないのである。人間は、自然に積極的に働きかけることで、自然を手中におさめたと錯覚し、その結果として環境問題などのさまざまな地球規模的諸問題を引き起こしてきたのである。

前節の【図2】が示す構図は、逆にいうなら、自然には我々には見えない部分が残されていることを示している。言語あるいは文化の多様性は、その対象となる自然の領域が自然全体にまで達しないからこそ、今日でもなお意味があるのである。言語・文化多様性の保持が必要であるのはそのためである。

しかし、無制限の技術的進展は問題があるにしても、多様な言語・文化を有する諸地域が、多様性の保持がゆえに現代文明の恩恵に浴さないということはまた別な問題でもある。本稿では議論が及ばなかったが、言語・文化多様性の保持は諸地域の人々にどのような意味をもたらすのか、逆に、真に保持すべき多様性が何であるのかは、なおも十分に検討されるべき問題であると思われる。

## 参考文献

- Brown, H. Douglas (2007), *Principles of Language and Teaching* (5<sup>th</sup> ed.), White Plains, NY: Pearson, 2007.
- Chase, Stuart (1962), "Forward", In Carroll, B. John. (Ed.), *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1939) .
- Fong, Mary (2006), "The Nexus of Language, Communication, and Culture", Samovar, A. Larry & Porter, E. Richard & McDaniel, R. Edwin (Eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (11<sup>th</sup> ed.), Belmont, CA: Thomson Wadsworth, 2006.
- Gay, Geneva (2006), "Culture and Communication in the Classroom", Samovar, A. Larry & Porter, E. Richard & McDaniel, R. Edwin (Eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (11<sup>th</sup> ed.) , Belmont, CA: Thomson Wadsworth, 2006.
- Harmon, David & Maffi, Luisa (2002), "Are Linguistic and Biological Diversity Linked?", *Conversation Biology*, Winter 2002, Vol.3, no.1.
- Maffi, Luisa (2007), "Biocultural Diversity and Sustainability", In *Sage Handbook on Environment and Society*, ed. by J. Pretty, A. Ball, T. Benton, J. Guivant, D. Lee, D. Orr, M. Pfeffer, and H. Ward, London: Sage Publication, 2007, pp.267-277 (Ch.18).
- Maffi, Luisa (2000), "Introduction: On the Interdependnce of Biological and Cultural Diversity", *On Biocultural Diversity: linking language knowledge and the environment*, Smithsonian Institution Press, 2000.

- Sapir, Edward (1921) , *Language: An Introduction to the Study of Speech*, NY: Harcourt, Brace and Company, 1921.
- Sapir, Edward (1961) , Culture, Language and Personality, edited by David G. Mandelbaum, University of California Press, 1961.
- Whatmough, Joshua (1957) , Language: A Modern Synthesis, NY: The New American Library of World Literature, 1957.
- Whorf, Benjamin L. (1962) , "The Punctual and Segmentative Aspects of Verbs in Hopi" , In Carroll, B. John. (Ed.) , *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (pp.51-56) , Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1936) .
- Whorf, Benjamin L. (1962) , "The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language" , In Carroll, B. John. (Ed.) , *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (pp.134-159) , Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1939) .
- Whorf, Benjamin L. (1962) , "Science and Linguistics" , In Carroll, B. John. (Ed.) , *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (pp.207-219) , Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1940) .

- 
- 1 Convention on Biological Diversity 地球上の生物多様性を保全するための包括的な枠組みとしての条約。国連環境開発会議に先立つ1992年5月22日に採択、リオデジャネイロで開催されたサミットにおいて署名開放され、翌1993年12月29日に発効された。日本は1993年5月に締結。2009年10月末現在、192の国と地域がこの条約を締結している。
  - 2 「生物多様性条約第10回締約国会議」(COP10)
  - 3 Terralingua 絶滅の危機に瀕する言語の保全を目的として組織された国際組織で、今日は生物文化多様性 (biocultural diversity) について様々な活動を展開している。
  - 4 Luisa Maffi (2007) , "Biocultural Diversity and Sustainability" , In *Sage Handbook on Environment and Society*, ed. by J. Pretty, A. Ball, T. Benton, J. Guivant, D. Lee, D. Orr, M. Pfeffer, and H. Ward, London: Sage Publication, 2007, pp.267-277 (Ch.18).
  - 5 Ibid., p. 267.
  - 6 David Harmon , Luisa Maffi (2002) , "Are Linguistic and Biological Diversity Linked?" , *Conversation Biology*, Winter 2002, Vol.3, no.1., pp.2.
  - 7 Luisa Maffi (2000) , "Introduction: On the Interdependnce of Biological and Cultural Diversity" , *On Biocultural Diversity: linking language knowledge and the environment*, Smithsonian Institution Press, 2000, pp.1-3.
  - 8 Rio Declaration, Agenda 21, Convention on Biological Diversity, 1992.
  - 9 Luisa Maffi (2007) , p.268.
  - 10 Ibid., p.269.

- 11 Ibid., p.269.
- 12 Ibid., p.269.
- 13 Mary Fong (2006), "The Nexus of Language, Communication, and Culture", Samovar, A. Larry & Porter, E. Richard & McDaniel, R. Edwin (Eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (11<sup>th</sup> ed.), Belmont, CA: Thomson Wadsworth, 2006, p.214.  
この主張は、Sherzer (1987) の言及をFongがさらに展開させたものである。
- 14 Ibid., p.214.  
この主張は、Kramsh (1998) の言及をFongがさらに展開させたものである。
- 15 Ibid., 214.
- 16 Geneva Gay (2006), "Culture and Communication in the Classroom", Samovar, A. Larry & Porter, E. Richard & McDaniel, R. Edwin (Eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (11<sup>th</sup> ed.), Belmont, CA: Thomson Wadsworth, 2006, p.327.
- 17 H. Douglas Brown (2007), *Principles of Language and Teaching* (5<sup>th</sup> ed.), White Plains, NY: Pearson, 2007, p.188.
- 18 Ibid., p.188.
- 19 Ibid., p.43.
- 20 Ibid., p.194.
- 21 "Sapir-Whorf Hypothesis" はサピアとウォーフが共同で提起した仮説ではなく、サピアとウォーフのそれぞれによる同じ主旨の主張を併せたものである。この仮説（理論）の形成経緯はそれ自体興味深い点があるが、ここではその主張のみについて扱う。
- 22 ここではWhorfの次の文献の冒頭に示されたSapirの言説から引用した。  
Benjamin L. Whorf (1962), "The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language", In Carroll, B. John. (Ed.), *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (pp.134-159), Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1939), p.134.
- 23 Edward Sapir (1961), *Culture, Language and Personality*, edited by David G. Mandelbaum, University of California Press, 1961, p.1.
- 24 Ibid., p.68
- 25 Edward Sapir (1921), *Language: An Introduction to the Study of Speech*, NY: Harcourt, Brace and Company, 1921, p.240.
- 26 Ibid., p.232.
- 27 Ibid., p.236.
- 28 Stuart Chase (1962), "Forward", In Carroll, B. John. (Ed.), *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1939), p.iv.
- 29 Edward Sapir (1961), p.18.
- 30 Joshua Whatmough (1957), *Language: A Modern Synthesis*, NY: The New American

- Library of World Literature, 1957, p.18.
- 31 Ibid., p.18.
- 32 Ibid., p.25.
- 33 詳細は以下を参照のこと。
- Benjamin L. Whorf (1962) , "The Punctual and Segmentative Aspects of Verbs in Hopi" , In Carroll, B. John. (Ed.) , *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (pp.51-56) , Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1936) .
- 34 エスキモーの雪の表現に関しては以下を参照のこと（とくにpp.210-216）。
- Benjamin L. Whorf (1962) , "Science and Linguistics" , In Carroll, B. John. (Ed.) , *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (pp.207-219) , Cambridge, Ma: The M.I.T. Press, 1962 (original work published 1940) .
- 35 “monoculture” は、本来は“单一栽培”的意。ここでは近代科学的な視点を指す（以下の文献を参照）。
- ヴァンタナ・シヴァ、戸田清他訳、『生物多様性の危機 精神のモノカルチャー』、明石書店、2003年。